

スペインの共同体

アナキズム社会の構想とかかわりのある、これまでにかかげた文書の大半、それに、絶対自由主義的な建設の具体的な経験、一九三六年のスペイン共同体の経験に関する記録を、対比として、補足として付け加えることは有益なことと思われる。スペインの革命と内乱の中でアナキストによって果たされた政治的、軍事的役割は、おそらく、本書の後半で明らかにされる。しかし、今すぐ當時を、すなわち、数々の予測を見たあとで自治管理の実践を見ることが、われわれには有益なことと思われた。準備した人々と実践した人々との絆は、直接的なものである。後者は、この上ない正確なやり方で、前者の教訓を集めた。したがって、読者は、アナキズムの、破壊的なものではない、建設的な傾向の真価を、よりよく認めうるであろう。

アウグスチン・スーチャー^①による

スペインで「一九三六年七月十九日以来」展開されている出来事は、まったく新しい何かを示していた。事実、スペインの労働者による土地と工場の占拠は、労働の諸条件と賃金の改善を獲得するために、所有者たち、幹部たち、公権力に、単に圧力をかけることを目的としていたのではなかった。それは、生産と交換の手段の、それらを使用するもの全員による直接管理に、断乎として向かっていた。——そして、耕されず放置されている土地か、赤字企業の場合、「占拠」は、社会的救済の真の処置の性格を持っていた。ブルジョア・スペインは、寄生的な管理によってせよ、新しい諸国との競争によ

つてにせよ、農業製品と工業製品の世界市場でハンデキヤップを負わされ、失業者たちを救済することも、故国の土地を開拓することも、そこから食糧を引きだすこともできなかった。

それに対する労働者と農民のスペインの回答は、党的いっさいの官僚制、いっさいの独裁を離れて、下部から行なわれた正義と責任の行為であり、それによって、一国は一国を養うこととなった。

七月十九日とそれに引きつづく日々の中で、すべての大企業を、その指導者たちは放棄した。鉄道会社、都市交通会社、海運会社、大金属工業会社、織物工業会社のすべての社長たち、経営者諸協会の会長たちや代表たち、すべては姿を消した。労働者階級によって火蓋を切られた、叛逆への防衛措置、ゼネラル・ストライキは、八日間わたってすべての経済活動を麻痺させた。

叛逆が粉碎されて以来、労働者の諸組織はストライキを終わらせることを決定した。バルセロナのCNTの組合員たちは、労働の再開はかつてと同じ条件で行なわれてはならない、と確信していた。ゼネラル・ストライキは、賃金の防衛ないし改善を目的としたストライキではなかった。実際それは、より高い賃金が労働のよりよい条件かを獲得することにかわりはなかった。企業家たちは誰もそこにいなかった。労働者たちは、機関車、あるいは、電車、あるいは事務所の、彼らの既存の場所にただふたたびつくことだけではすまなかった。彼らはま

た、工場の、職場の、企業等々の、全面的な管理を引き受けねばならなかった。いいかえれば、産業と全経済活動の管理は以来、国の経済のあらゆる部門に従事している労働者と職員の責任に帰することとなった。

スペインにおいては、特にカタルニャで、社会化の過程が共有化によって始められた。共有化は、あらかじめ考えられた計画の達成とみなされてはならない。それは自然発生的なものであった。とにかく、この転換へのアナキズム理論の影響は異議をはさみえないものである。長い年月にわたって、スペインのアナキストたちとサンジカリストたちは、社会の社会的転換を彼らの最高の目的とみなしていた。彼らの組合やグループの集会において、彼らの新聞や小冊子や書物の中で、社会革命の問題は、絶えず、体系的な形で、討議されていた。プロレタリアートの勝利の翌日、何が起こらねばならないか？政府機構は粉碎されなくてはならない。労働者たちは、彼らの企業の運営に自ら当たり、自らそれを管理しなくてはならない。組合は、全経済活動を調整しなくてはならない。各産業部門間の提携組織は、生産を指導しなくてはならない。地域的な連合は、消費を規正しなくてはならない。そうしたものが、アナルコ・サンジカリストたちの思想であり、FAIがまた採用していた思想であった。その集会や大会において、FAIは、経済活動は組合によって規正されなくてはならない、と絶えず宣言していた。

……一九三六年七月十九日以後、CNT傘下の組合は、生産と食糧補給とを引き受けた。組合は、まず最も緊急の問題、住民への食糧補給を確保する問題の、解決に努力した。各地区で組合事務所内に調理場が設けられた。食糧補給各委員会が、街や村の中央倉庫で食糧を探すことに専念した。それらの食糧は、組合によって価値を保証された引換券で支払いを受けた。組合の各メンバー、民兵の夫人と子供、そしてまた住民全般、すべては無料で食糧を支給された。ストライキの期間中、労働者たちはいかなる賃金をも受けとらなかった。反ファシスト民兵委員会は、労働者と職員に、その期間中に彼らが働いたとすれば彼らが受けとったはずのものに相当する金額を、支払うことを決定した。

工業の共有化

……共有化の第一の局面は、労働者たちが自分の責任で企業の経営を引き継いだ時に始まった。各職場、各工場、各事務所、各小売店で、管理に当たる組合代表たちが任命された。しばしば、これらの新しい指導者たちは、理論的準備もなく、国民経済について大した知識もなかった。しかしながら、彼らは、彼らの個人的な要求と時勢の必要とするものについての、深い認識を持っていたのである。

……彼らは、彼らの職権を、彼らの産業の課程を知っていて、助言することができた。彼の発意と創意の精神

は、素養の欠如を補っていた。

織物工業のいくつかの工場の中では、ある反ファシスト文書の影響で、赤と黒との、絹のネッカチーフが作られた。このネッカチーフが売られだされた。「諸君はどんなふうに価格を計算するのか？ 諸君はどんなふうに利益の幅を決めるのか？」とある外国のマルクス主義者のジャーナリストが質問した。「私は利益の幅に関することは何一つ知らない」と労働者が、質問を発したものに答えた。「われわれは、書物の中で原料の価格を探し、日常の支出を計算し、予備金のための追加を加え、賃金の総額を足し、反ファシスト民兵委員会のために一〇%の追加を加えた。価格はそうして決められた。賃金は増加された。ブルジョア経済における聖なる観念、利益の幅は、反ファシズム闘争のために活用された。

そんなふうにして、大半の企業において、労働者による生産の管理が実行された。経営者たちは、彼らが新しい経済管理に反対するかぎり、道端に放りだされた。彼らは、もし新しい事態を受け入れるなら、労働者として認められた。その場合彼らは、技師として、取引責任者として、あるいは単なる労働者として、仕事をした。彼らは、その職種に応じて、労働者あるいは技師のものに相当する賃金を受けとった。

この発端、この変化は、比較的単純なものであった。困難はもつとものになって現われた。かなり短期間のうちに、望む時にはや原料がなくなった。革命後の初期

の間は、原料は徴発されていた。ついで、人々はそれらに支払わねばならなかった。つまり、それらの清算を考慮に入れねばならなかった。外国から、原料はほとんど来なくなり、原料と完成品の価格があがることとなった。賃金はあがっていた。しかし、その増加は全般的なものではなかった。いくつかの産業で、それは著しかった。共有化の最初の局面では、労働者ないし職員の賃金は、同じ産業の枠内でさえまちまちであった。

……組合は、自ら企業の管理に当たることを決定した。企業の組合は、産業企業に変身した。バルセロナの建築労働組合は、市のさまざまな建築企業の仕事の施行を引き受けた。理髪店は共有化された。各理髪店には、一人の組合代表がいた。毎週、彼は、組合の経済委員会に、あらゆる収入のあがりを持参した。理髪店の支出は、賃金同様に、組合から支払われた。

……しかしながら、若干の経済部門は、他よりもよく動いていた。豊かな産業、貧しい産業があり、高い賃金と低い賃金があった。共有化の過程は……この局面で止めてはならなかった。バルセロナの組合の地方連合（CNT）では、連絡委員会の創設が討議された。この委員会は、各種組合のあらゆる経済委員会と結びつかねばならなかった。金は一カ所に集中されねばならなかった。平等化金庫は、基金の正当な配分に注意をはらわねばならなかった。若干の産業においては、初めから、この連絡委員会と平等化金庫が存在していた。労働者によって

管理されていた、利益を生みうる企業、バルセロナのバス会社は、収入の過剰があった。この過剰の一部は、外国での資材購入の予備金に当てられていた。他の部分は、バス会社よりも財政状態のよくない、電車会社を援助することに当てられていた。

ガソリンがほとんどなくなった時、四千のタクシー運転手が失業に陥った。彼らの賃金は、やはり組合から支払われていた。それは、運輸労働組合にとって重い負担であった。組合は、他の二つの組合と、バルセロナ・コミューンに援助を要求しなければならなかった。

織物工業においては、原料の極度の欠乏のため、労働時間が短縮されねばならなかった。若干の工場では、人はもはや週に三時間しか働かなかった。しかしながら、労働者には支払われねばならなかった。織物工業労働組合は自由にしうる手段を持たなかったで、かわってカタルニヤ自治政府が労働者に支払わねばならなかった。

共有化の過程は、この段階でとどめてはならなかった。サンジカリストたちは社会化を要求した。しかし社会化は、彼らにとっては、国有化、つまり国家による経済の管理を意味してはいない。社会化とは、共有化の一般化でなくてはならない。それは、中央金庫への各種組合の資本の集中にかかわっていた。地域的な連合の枠内での集中は、一種のコミューンの経済企業へと変化するであろう。それは、コミューンの枠内での労働者の活動

の、下からの社会化の問題である。

農業における共有化

単にカタルニヤにおいてばかりではなく、スペインの他のあらゆる地域においても、共有の伝統は根強いものであった。將軍たちの権力が打ち砕かれた時、既存の大地所有地の共有化のための全般的な渴望が、国中に確認された。組合組織とアナキスト・グループは、共有化のための運動の先頭に立った。彼らは、彼らの伝統に忠実であった。

土地の共有化は、スペインでは、ロシアとは別の形をとった。一コミューンの枠内での農業所有地は、それがかつて大地所有者に属していたものであるかぎり、共有化された。大地所有者は、聖職者と軍人との一味の側につき、民衆に敵対していた。経済的変革を受け入れた土地所有者たちは、共有化の先頭に立っている組合の枠内で、働くことをつづけることができた。輸出業者もまた組合に加担した。そして多くの場所で、小土地所有者たちも同様であった。

土地と関連の事業は、農村の労働者の共同作業下におかれた。あらゆる生産物は、賃金を支払い産物売、組合に引き渡された。組合に加盟することを望まなかった小土地所有者たちは、共有化の外縁で働いていた。彼らは、自分たちの生存の手段を確保するために、辛苦して働かねばならなかった。誰も彼らにいかなる圧力もか

けなかった。しかし、彼らは共同生産の利益にもはや参加しないではいらなかった。組合は、そのかわり、労働を合理的に組織した。そこには、実際に、一人のための全員、全員のための一人、という原則が支配していた。したがって、小土地所有者もコミューン（ないし共同体）の外縁で暮らしていた。農業機具や食料品等々の分配の際、小土地所有者は、一番最後にまわされた。

農業労働者の組合は、今日では経済企業を形成している。輸送のためのさまざまな果物の洗浄と包装は、組合の管理の下におかれている。若干のコミューンにおいては、経済活動全般が組合の手中にある。組合は、労働の組織のための、消費のための、分配のための、反ファシズム闘争のための、各種の委員会を任命した。カフェと映画館は、それがあるかぎり、組合の管理下におかれた。小さな地区では、各種の職業ないし職種の間には、相違は見られなかった。すべては、経済の生きた神経となり、同時にコミューンの政治的・文化的センターである、地区的な連合の中に結集している。

ある産業部門、たとえば銀行では、共有化は行なわれなかった。

ではなぜ、諸銀行は組織化されなかったか？ 銀行の職員は、強力に組織されてはいなかった。彼らは、CNTの組合にではなく、共有化に反対していたUGTの組合に加入していた。社会主義的なUGTは、事実、別の伝統を持っていた。そのイデオロギーは、社会民主主義

であり、それは国有化を望んでいた。この理論によれば、社会化は、法令を通じて国家によって実施されねばならなかった。政府は銀行の共有化の法令を布告していなかった。……銀行の財産の徴発は、財政力の中央による唯一の配分と財政計画の樹立を可能としたであろう。中央による調整がとてえられえたであろう。工業の代表、工業の組合代表の働きかけの下で、銀行の職員たちは、国の経済の重要な諸部門についての融資計画を樹立したであろう。財政機関は国の財政能力を共有化のためにただちに役立てたことであろう。共有化は部分的なものにとどまらず、それは全経済活動に波及したであろう。

共有化の七カ月のうち、組合は、経験に教えられて、各種産業の全共有化企業を協同させることが必要であることを確認した。組合は、したがってそれまでにえた経験に立脚していた。今日では作られている中央の指導部は、下部機関の創設に専念する必要はなかった。それは、すでに存在している。共有化の頂上は、産業の組合を、企業や職場においては職種別の各部門を、基礎とする強固な土台に立脚していた。

組合はまた、それを独占的にしようとするのではないが、食糧補給を規正する意向を表明した。食品関係の組合は、パン製造所の運営を引き受けた（バルセロナには、大きなパン製造所も製パン工場もなかった）。それらのかたわらに、かつてのように機能しているパ

ン屋の小さい店がなお残っていた。田舎から都会への牛乳の輸送もまた、組合によって確保され、組合はさらに、大半の乳製品販売店の運営にも当たった。食品関係の組合は、農業諸企業を管理し、共有化農場と協同して活動した。

……ロシアにおいては、革命の初期には、商店は閉鎖された。スペインではそういうことは起こらなかった。大商業は組合の手に移された。小商業は、その商品を組合から受けとった。小商業にとって、価格は全般的に定められていた。国内の商業は組織され管理されていた。食糧補給の頂点には、食糧補給評議会があった。その目的は、各地区がその必要にしたがって供給されるように、カタリニャにおける食糧補給の全体を組織し統一することであった。一定の価格が共有化コミュニティによって決められ、漁師の組合やその他の食糧部門の組合は、食糧の供給に同意していた。食料品の値上りを防ぐこと、それがこの経済政策の目的であった。そのようにして、投機師や買占人は排除されることとなった。

十二月の半ばに、この政策は中止された。十二月十六日、新しいカタリニャ政府が設立された。共産主義者たちは、政府からのPOUM（マルクス主義統一労働党）の排除に成功した。この政府の成立に当たって、食糧補給省は、（第三インターナショナルに加盟していた）統一社会党員、コモレーラに与えられた。もう一つの省は、CNTのサンジカリスタたちの代表、デムネックに

与えられた。コモレーラは食糧補給の独占を廃止した。商業の自由が改めて導入された。価格引上げへの道が開かれた。この分野では、共有化は中止されたのである。輸送部門においては、共有化の好ましい影響が明らかであった。価格の全般的な上昇にもかかわらず、バルセロナの輸送会社の運賃は上がらなかった。バルセロナの街路では、新しいバスとともに、塗装されたばかりの新しい電車が見られた。たくさんタクシーも新規に引き渡されていた。

状況は、織物工業では同じようによいというわけにはいかなかった。原料の不足のために、多くの工場では、人々はもはや週に二、三日しか働かなかった。しかし賃金は四日分支払われていた。この状況の延引が、それらの企業を弱体化させた。四日分の賃金しか受けとらない労働者の所得は不十分なのであった。それは、共有化の結果ではなく、明らかに戦争の結果であった。カタリニャの織物工業は、その主要な販路を失っていた。アンダルシアの一部、エストレマドゥーラ、カステイリヤ・ラ・ビエハ、そしてスペインの北部すべては、アストゥリアスの人口の多い工場地帯とともに、ファシストたちの手中にあった。新しい販路を見出す手段はなかったのである。

……一九三七年一月のうちに、状況はいくらか改善された。人々は、軍のために働いた。人口六万の織物の町、サバデルでは、すべての労働者が仕事についていた。

バルセロナでは、いくつかの製糸工場において、労働時間にはつねに短縮されていた。

……共有化は、新しい展望を開き、新しい道へと導いた。ロシアでは、革命は国有化への道をとった。……スペインでは、……民衆自身が、田舎の農民が、都会の労働者が、土地と生産手段の経営を引き受けた。はなはだしい困難の最中で、手探りで、誤りを重ねながら、彼らは、つねに前に進み、労働者自身が彼らの労働の成果の受益者である公正な経済制度を、樹立しようと努力したのである。

アラコンの共同体連合の綱領 1937/3/14

I 農業共同体の地方連合の機構

- 1 地方の経済力を調整するために、そして、われわれのものである連合主義と自律の原則に一致する、連合に連帯保証を与えるために、共同体の地方連合を建設する。
- 2 この連合を結成するために、次の規則を守ることを。
 - a 共同体は郡ごとに連合しなければならない。
 - b 郡委員会相互間の結合と調整を維持するために、共同体、地方委員会が創設されよう。
 - 3 各共同体は、その生産と消費についての正確な統計をつくること。各共同体はそれをそれぞれの郡委員会に送ること。——郡委員会はそれを地方委員会に渡すこと。
 - 4 共同体内における貨幣の廃止と配給手帳によるその代行は、必要な量の食糧を各共同体が自由に処置することを可能としよう。
 - 5 地方委員会が、輸入された産物の共同体への補給

III 地区諸評議会および小土地所有者に対してとるべき態度

- 1 地区的諸評議会との関係
 - a 各種反ファシスト組織の代表からなる地区諸評議会は、アラゴン防衛地方委員会から認められた、完全に適法な特殊な役割を持っている。
 - b 共同体の管理上の各評議会は、地区のおよび郡の諸評議会の役割とは、はっきり区別される役割を果たしている。
 - c しかし、組合が以上二つの役割を持つ代表を任命し監督しているように、それらの役割は、同一の同志によって果たされることもできる。もちろん、どのような形であれ、それらが混同されてはならないが。
- 2 小土地所有者との関係
 - a 自分自身の意志で、共同体から離れている小土地所有者たちは、労務か品物かの、奉仕を共同体に要求する何らの権利も持っていない。彼らは、彼らたちだけでこと足りることができる、とみられているからである。
 - b すべての田舎と都会の所有地、および収用の際に叛逆分子に属していた、そして共同体に受け入れられた、その他の財産は、共同体の手中に移される。

さらに、今日まで、土地所有者、小作人ないし折半小作人によって耕されていないすべての土地は、共同体の手中に移される。

を行ないうるように、共同体または郡委員会は、外国貿易のための地方基金を創設するために、各地区ないし郡の富である、相当量の産物を地方委員会に供給すること。

II 土地管理の新しい組織形態

- われわれは、民衆の所有地の管理についての未来の調整機関として、自治区ないしコミュニティを受け入れる。しかしながら、郡ごとに連合した共同体のメンバーの資格で、われわれは、われわれが耕作する所有地の地区的な制限を廃止することを提案する。われわれの意見では、大会が次の点を考慮することは必要であろう。
- 1 各共同体は、郡の各連合を構成しているので、それらの連合によって管理される地区的な土地は、内部での境界のない、唯一の土地をしかもはや形成していないことは了解されよう。そして、耕作地、労働用具、農業機械、それらに要する原料に関することすべてについては、それらは、それらが不足している各共同体の意のままに委されよう。
 - 2 労働力があり余っている、または、自分たちの仕事にとって適切な時期ではないので、一年のうちのある時期に、自分たちのすべての生産者を活用していない共同体は、助力を乞われよう。そして、空いている仲間たちは、郡委員会の調整の下に、働き手が不足している共同体を強化するために、活用されることとなろう。

- c 共同体の外に在るいかなる小土地所有者も、自分自身で耕しうる以上の土地を持つことはできない。この所有が、新しい社会からいかなる特権をも受けとるものではないことは、もちろんである。
- d 小土地所有者は、彼の人格ないし財産が共同体の秩序をかき乱す因をなさないかぎり、提携した労働者たちの間にあって、自由であり責任あるものとみなされる。

共有化の地区的事例^⑥

レセーラ（アラゴン）

レセーラは、サラゴサ地方第一の村であり、十二キロ離れているベルチーテの裁判管区に属していた。

この村は、人口二千四百を数え、いくつかの産業、特に石膏産業を持っていた。それ以外はすべて農業であり、その最も重要な資源は、麦、ブドウ酒、サフラン、そして少量の他の穀物である。

今日では民兵のための野営地に変わったこの地区に着きながら、われわれがする最初のこととは、どこに民衆委員会があるかを探ることである。それを、われわれはここ、元村役場の中に見出す。

われわれの質問に答えるのは、レセーラ生まれの小学校教師、ベードロ・ナバーロ・ハルケである。

——委員会は、反ファシスト革命委員会と名づけられ、CNTに加盟している各種の仕事の労働組合から出た、七人のメンバーで構成されました。それは、完全な行動の自由を持っており、制約やいかなる政党の影響も

受けてはおりません。われわれは総会で任命されました。そして、われわれは全村の渴望を代表しています。われわれは、住民の生活と行政に関するすべてについて、村役場と同じ権限を持っています。やはりCNTの組合に属する五人のメンバーからなる地区行政評議会があります。組合は、レセーラの畠と産業の労働を組織することに専念しています。われわれは、十二人の副委員と協力して、この戦線で闘っている部隊と集団労働の必要事項に専念する執行委員を一人任命しました。すべてはごく自然に革命委員会と一致しています。

——あなた方は土地を共有化しましたか？

——それは、きわめて難しい問題でした。あるいは、もっと正確に言えば、この問題は今もなお存在しています。なぜならわれわれは、われわれの考えの優秀さと利益とを確信しているわれわれのところに、人々が来られることを望んでいるからです。われわれは大地所有を共有化しました。そして、われわれは、現在まで、小土地所有を尊重してきました。もし、状況がわれわれにとって好都合なものなら、われわれは、小土地所有者が自ら共有化に加わることを見る希望が持てましよう。なぜなら、レセーラの人々は、彼らが収獲した相当量の産物を共同体側に供給してわれわれにそれを示したように、理解力に富んでいるからです。

現在、すべての小所有地では、サフランの取り入れが行なわれています。それは共有の下におかれ、消費に当

てるためと交換のために倉庫に収められます。

収獲は支払いを受ける大地所有者によってほとんどすべて持ち去られていたので、かつては食べるものをまづ持っていなかった小土地所有者たちは、第一に彼らの土地を保持することを望みました。しかし、総会で、人々は、共同で収獲する必要を理解させました。加盟は全員一致してでした。人々の意志を尊重すること、そして圧力をかけることなく、模範によって彼らを惹きつけることが必要です。革命委員会は、レセーラ戦線の社会問題担当副委員、同志マニエル・マルチネスの夥しい仕事を知らう希望しました。全村は彼の活動に感謝しています。

——彼は、長いあいだ委員会で働いているのですか？

——三カ月近くです。八月二十五日、彼は、それ以来、自由共産主義の制度を樹立し、村の中で貨幣を廃止する役割に就きました。

われわれは、トルトーサとレニューと各種の産物を交換しました。われわれは、この戦線の民兵のために、五千の羊を屠殺しました。われわれは、二十八万キロの麦をも引き渡しました。食糧補給を引き受けている委員会は、そのかわり、民兵でない住民にあらゆる種類の品物を供給しています。

——貨幣の流通なしに、自分たちのさまざまな必要を満たすために、小さな土地所有者はどんなふうになっているのですか？

——われわれはすでに、まず実践してみせて疑める、

としました。ここには、階級も差別もありません。われわれにとって、おそらく明日はそうであることを止める小土地所有者は、一生産者です。労働者地区の代表でもある執行副委員たちを介して、人々は働いている労働者たちを完全に知っていますし、食料品店に家族手帳をおいている食糧補給委員は、各家族に彼らが必要とするものを与えます。配分は最も公正なやり方で行なわれています——と、委員長ナバーロは、最後にわれわれにいった。——われわれは、あらゆる領域におけるわれわれの制度の優位を証明するにいたるでしょう。

……革命委員会の場所から少し離れたところに、レセーラの倉庫があった。それは、舞踏場として落成されるはずの建物であって、大きな広間と特殊な住居部門とに占められていた。倉庫には、食料品、牛乳壺、野菜の袋、油の罐、積み重ねられた貯蔵肉の箱、等々が溢れていた。そして、上の階には衣服の置場と農業用具があった。したがって、貯蔵はたっぷりしていた。

アンボスタ（カタルニャ）

……アンボスタは人口一万の村であり、その経済は農業に立脚していた。主な耕作は、米の耕作であって、それはこの村にカタルニャ第一の位置を与えていた。

九月における、米の最新の収獲で、人々は三千六百万

キロの米を取り入れた。粳米百キロは白米六十キロの消費量を提供することに留意しなければならない。

労働者たちによって共有化された土地は、耕されるのによい条件のおかげで、より多くの収穫高をもたらすであろう。エブレ河の豊かな水に灌漑された土地は、アンポスタの民衆がそうであるような、勤勉な自由な民衆に、ずっと大きな富となる産物をもたらすであろう。

この地区には、千二百人の土地労働者がいる。農業を強化することができるよう、人々は、古いオリヴの木と収穫のないいなごまめを抜きとり、かわりに彼らが最も必要としている灌漑用の土地を準備した。あらゆる近代的な設備を備えつつ同志たちによって作られた養鶏農場は、注意してみるのに価する。それは、二十万ベセタの価値があると評価されている。今年は、設備の取付けが終わり次第、そこに五千の雌鶏が入られる予定で、来年は、孵卵器によって、週に二千の雛が産みだされうると考えられている。

養鶏に関する仕事を除けば、他のすべての仕事は共有化されている。大きな農場が作られ、そこでは、牛、豚、羊の飼育が行なわれることとなる。この農場には、すでに七十頭の乳牛があり、その産出量は、近代的な酪農業を創設することを可能とするものである。

共同体は、完全にその仕事を成就しう。なぜなら、それはすでに十四のトラクター、十五の打穀機、七十頭の馬を持っているからである。土地は自治体のものとな

との交換のおかげであり、そして、なおもこの滋養のある食物が大量に残されている。第一義的に必要な品物の分配のために家族食糧カードが作られ、配給量は三日ごとと与えられている。

旧教会内には、消費者協同組合が設けられた。さまざまな依存関係から生まれた慣習を見ることは興味深いものである。住民の大多数は、この協同組合で必要品を供給する。ここでは、週に十一万ないし十二万ベセタの商品を売る。

村には、年齢あるいは健康上の理由で働くことのできない、約四十五家族がある。自治体は、彼らに何一つ不足しないように、必要なことをしている。

要するに、コミュニティの食糧補給すべては保証されている。

——われわれには、と自治体の書記が微笑しながらいった、ただブドウ酒とアルコールだけが不足している。しかしそれは、われわれができるだけそれらがアンポスタに入らないことを望ましく思っているからだ。

自治体は、重要な改善を実現すること、特に村の入口に見られる古いあばら屋群を解体すること、下水渠を完成すること、水道供給を拡大すること、を望んでいる。

アンポスタでは、スペインで初期のものであり最も大規模でもあるものの一つ、給水所が稼働している。村の需要に供され、エブレ河から引かれている水は、液体塩素によって浄化されている。

り、農業共同体に属さず、自分のために土地を耕そうとしていくつかの小農地を手に入れたいと望んでいる人々は、それを自治体に求めなくてはならない。村は、それを彼らに許可する。そんなふうにして、憎むべき賃金、今日まで存続してきた隷属の名残りは廃止されよう。建築労働者たちも共同体化された。彼らの部門には、モザイクの製造、石膏炉も含んでいた。演芸やほかの職業集団もまた共同体化された。

教育については、アンポスタはかつてはきわめて遅れていた。現在、町には三十七の学校がある。これは、革命以前よりも十五の学校がふえているという数字である。教課は、義務制である……。

新しい学校を設けるために、自治体は、かなりの数の建物を押収した。自治体はまた、カタルニャ政府に助力を求めなくてもよいように、必要な資材を持っている。

……六つの成年学校も創られた。近いうちに、職業技芸学校と学校用食堂も創られるはずである。

自治体は、図書館をすでに持っていて、それは、一般的に、勉強することを熱望している民衆の欲求を満たすために充実されるはずである。

教育計画については、いくつかの公開講演が行なわれた。子供たちの間で、芸術への好みを養う目的で、合唱隊や演劇グループが近く作られる。教師たちはすでに見つけられている。

……アンポスタには窮乏は見られない。米と他の産物

衛生事業が実現されたおかげで、流行病や腸チフス、そして、かつては労働者たちがよく苦しめられたその他の病気も一掃された。

住民の求めに応ずる病院もできた。そして、付属施設として、かつてはまったくなかった無料診療所が付け加えられた。今では、望む人すべてを手当てしうる。最後に、結核患者を適切に治療するために、村の外にサナトリウムが建てられた。

いかにCNTがアンポスタにおいて優勢であるとはいえ、自治体の各種の責任は、CNTとUGTのメンバーたちに分担されており、そこにはこの上なく完全な調和が支配していた。

……あらゆる市街地区の所有地は共有化され、地代は軽減され、その総額は自治体の用に供された。自治体は、年に約五十万ベセタを生産しうる塩田を押収した。そして、洗濯工場を作ることが望まれている。

……家族の賃金を定める計画がある。人々はそれを実現するための最善の方法を研究している。そして、自治体が、あらゆる費用を差し引いた利益を使う最善の方法を研究するために、年に一度民衆を招集することは、了解済みである……。

レバンテ地方において

ガストン・ルヴァルによる

CNTのわが同志たちによって構成されるレバンテ地方連盟は、農業共同体の類似の連盟の設立に基礎として役立ったが、五つの州、つまりカステリョン・デ・ラ・ブラーナ、バレンシア、アリカンテ、ムルシア、アルバセーテを包含している。スペインの最も豊かな地域の中に数えられる、すべて地中海に面した、最初の四つの州にとつての農業の重要さと、ほとんど三百三十万人に及ぶ人口の多さが、そこで行なわれた社会的達成を著しく際立たせている。私の意見では、農業共同体の事業が、最も広汎に最善の形で実現されたのは、レバンテにおいてであり、その自然の豊かさと同志たちの創造的精神のおかげであった。

……五つの州の中で、運動が最も発展したのはバレンシア州においてである。

そのことは、第一に、それが持つ力の大きさによって説明される。革命の時、人口は百六十五万人であった。ついで、人口の多い順番にあげれば、ムルシア州が人口六十二万二千、アリカンテが四十七万、カステリョン・デ・ラ・ブラーナが三十一万二千、最後にアルバセーテが二十三万八千であった。共同体の数は、人口の数に比例していた。しかし、社会化が初めからずっと決定的な

速められたリズムをとったのは、バレンシア州においてであった。

……一九三七年十一月二十一—二十三日の、レバンテ農民連盟の大会において、四百三十の組織された共同体が数えられている。五カ月の中には、五百が数えられている。この数字の真価を認めるために、五つの州は、最も大きな町から最も小さな村にいたるまで、自治体の総計は千百七十二に及んでいることを、指摘しておこう。したがって、バレンシアの果樹畑地帯においては、一平方キロ当り人口四百五十という、世界一の人口密度の場所をも含む、スペインの最も豊かな農業地方の四三%の地域で、二十カ月のうちに、五百の農業共同体が出現したのである。

一般に、それらの共同体は、アラゴンの共同体と同じ性格を持ってはいなかった。アラゴンにおいては、CNTとFAIの部隊のいずれにせよ独占的な優位が、共同体の発展を阻止しようとする、政府の権威に支えられた、警察、国家の行政、諸政党を長いあいだ妨害していた。レバンテにおいては、他のすべてのスペインの諸地方と同様に、権力は、機動隊、税関吏、まったく革命精神を持っていない士官に指揮される軍隊を持ち、その位置にとどまっていた。

したがって、アラゴンにおけるのと同じ執拗な速度で、初めから共有化することは困難であった。一方、レバンテ地方においては、しばしば小さな町を集めたも

のである村の大きさが、住民の一致した加盟を難しいものにしていった。政治的、社会的な分裂がそこにはずっと明確に見られたし、異なった諸傾向がはるかによく組織化されていた。

ほとんどつねに、レバンテにおいては、共同体は、土地の農民組合の発意の下に生まれた。しかし、共同体は、すぐに自律的な組織を結成した。それらはただ、共同体加盟者と非加盟の個人たちとの必要な合流点をなしていた組合と、外的な契約を結んでいただけである。事実、非加盟の個人たちは、他の物を交換するために彼らの産物を持ち込んできた。そうして、実際には、彼らの孤立主義は、組合の仲介的な事業の中で完全に薄められていたものであり、組合は以後、この新しい目的に応ずる機構として組織されていた。組合の中では——米のための、オレンジ、園芸、馬鈴薯、等々のための——委員会が作られ、それらは収穫と分配の倉庫に結びついていった。共同体自身も、自分の倉庫と委員会とを持っていた。のちに、この無益な二重性は廃止された。倉庫は統一され、委員会は共同体加盟者と組合に登録した個人たちとで構成された。他の人々は、たとえば機械、種子、肥料、殺虫薬、獣医薬品などを購入する委員会のような、混成の委員会を作った。連帯意識が拡大した。共同体の精神は、つねにいつそう反抗する人々の心をつかんだ。

……速やかに、この組織は統一し、すべてを合理化す

ることに向かった。割当配給と家族の賃金は、郡ごとに設定され、最も豊かな村々は最も貧しい村々を介在する郡委員会を通じて援助した。各郡の中央には、会計係、農業の専門家、獣医、植物の病氣と闘う専門家、技師、建築家、商業問題の専門家、からなる技術専門家たちの中核が形成されていた。

……各共同体には一人の獣医がいた。大多数の技師と獣医はCNTに加盟していた。そこにはまた多数の農業技術家が数えられた。ブドー栽培とブドー酒製造の専門家たちは、ほとんどすべてそこにいた。共同体にはなく、他の企業によって使用されていた技師や獣医もまた、欲得を離れて、共同体のためにも働き、草案の作成や計画の実現に努めた。革命の創造的精神は、進歩主義者たちの心をつかんでいたのである。

農学者たちは、必要で可能な計画、農業の計画化、私的所有が最も有利な地理的、気候的な条件に適合させることをつねに妨げている、耕作地の移転、を提案した。獣医は飼育を科学的に組織した。時々、彼は農学者に彼がとりうる処置について相談した。そして、農学者は農民委員会とともに、力の及ぶかぎり耕作を万全のものにしようとした。

そしてまた獣医は、共同の豚小屋、牛小屋、馬小屋、鶏小屋を建てるために、建築家や技師とも相談した。労働は自発的に計画化された。人々は、絶対自由主義的な原則にしたがって、下部において、下部から出発して計

画化した。

技師たちのおかげで、土地をよりよく灌漑したり、時には乾いた土地を改良させることを可能とする、非常に多くの運河や掘抜き井戸が建設された。吸上げポンプのおかげで、人々は水を集めたり分けたりすることに取いかかった。それは、技術的に新しいことではなかった。しかしそれは、この地方の多くの村にとっては、事実上、そうであつたのである。きわめて多孔隙の土地の性格、——平均四百ミリという——降水の少なさは、水の掘出しをきわめて難しいものとしていたし、水は五十メートル、百メートルないし二百メートルの深さにまで探らなければならなかった。ムルシアとカルタヘーナの地方では、おそらく最も大きな努力が払われた。ビラホヨースの周辺では、ダム建設が、それまで旱魃に苦しめられていた百万本のアーモンドの木に灌漑することを、可能とした。

建築家たちは、動物のための建設のみに専念していたわけではなかった。この地方の中を巡回しながら、彼らは、建築法、資材、基礎工事、位置、衛生など、人間の住居についても忠告を与えた。……アラゴンにおけるよりもずっと散らばっていない村々の交際が、この積極的な連帯を容易なものにした。労働もまたコミュニケーションを越えて行なわれた。中核が、植物の病氣と闘うために、硫化カルシウムで土地を改良するために、木を切るために、畑と果樹園で働くために、形成されていた。

樹畑とムルシアの菜園では、年に二、三回取り入れができた——いえる。

……地区の共同体が、飲物、果糖、罐詰などの製造所を作ることが有益だと考えた時、共同体は、その考えを、バレンシアにある中央委員会の関係部門に伝えた。中央委員会は提案を検討し、状況に応じて、提案者の代表団を招いた。もし、活用しうる原料を考慮し、すでにかなりの製造所が存在していたとしたら、委員会は理由を説明して否定の回答をした。もし設置が適切なら、提案を承認した。しかし、仕事は、提案した地区の共同体のみの責めに負わされたわけではなかった。地方委員会を介して、五百五十の共同体のすべてが、その努力に協力しなければならなかった。

……これまでに、国内および国際市場を失い、立ち腐れて、絶大な量の果実が姿を消した。それは特に、イギリス市場でパレスチナと南アフリカとの競争に出会った、完全に自然の状態で消費されるオレンジの場合に生じ、そのために価格を下げ、生産を低下することを強いられた。ヨーロッパ市場の大部分の閉鎖、フランスの部隊によって占領されるか寸断された市場の閉鎖、そして、政府による社会化の事業に対する妨害は、問題を深刻なものとした。それは単にオレンジの場合の不都合ではなく、馬鈴薯やトマトにとってもそうであった。一度ならず、共同体が何か手をうつことが必要となった。共同体は、馬鈴薯とトマトとオレンジのために、乾燥

……五百の共同体とレバンテ地方の支部は、五十四の郡連合の中に分けられており、郡連合は五つの州連合に集められ、州連合は全体を包括する地方委員会につながっていた。

年次大会で任命された彼ら——ジャッ姿で木靴をはいた農民たちに対して責任を持っていたこの委員会は、二十六の専門部門からなっていた。一般的に果樹の栽培、柑橘類、ブドウ、オリヴ、園芸、米、羊・山羊・豚・牛といった家畜、ついで産業部門があり、ブドウ・酒醸造、アルコール、飲物、罐詰、油、砂糖、果実、エキス、香料、その他各種の品々の製造。そのうえ人々は、各種製品の部門、輸入—輸出、機械製造、輸送、肥料の部門を作った。さらに、あらゆる種類の建物の地区的な建設を指導し促進する建築の部門。最後に、衛生と教育の部門。

……オレンジ生産の半分——ほとんど二千万キロー——は、レバンテの農民連盟の手中にあり、全体の収穫の七〇%が、その商業組織を通じて輸送され、売られた——それは、その倉庫、そのトラック、その船、そしてまた、一九三八年初めにフランスに(マルセイユ、ベルビニャン、ボルドー、セーント、ジェルブル、パリに)販売所を作った、その輸出部門のおかげであった。

同じことが、米についても——全スペインの四万七千ヘクタールに対し、バレンシア州のみで三万ヘクタール——、新鮮な野菜についても——バレンシアの野菜・果

場を設置した。そうして、一年を通じてそれらの乾燥野菜を活用することが始められた。馬鈴薯から、人々は澱粉と粉を作った。しかし、革新は特にオレンジにもたらされた。人々はオレンジから、以前よりもずっと大量の皮からしぼったエキス、オレンジの蜜、家禽のための新しい餌を作る目的で屠殺場の血を保存するための果粥、薬用療法のためのアルコールを取りだすオレンジ酒、を手に入れた。

ずっと大規模な、濃縮物の製造所は、オリベとブリアーナに設置された。野菜の罐詰製造所も、やはり連合の手中にあった。その主なセンターは、ムルシア、アルファサル、カステリオン、バテルナにある。

郡委員会の所在地は、多くの場合、鉄道ないし道路の近くに選ばれ、それは商品の輸送を容易にした。各郡の共同体は、そこに、彼らの産物の過剰品を送った。それらの品物は、帳簿に記入され、分類され、倉庫に収められた。そして、それぞれの数字が、連合がつねに交換や輸出や分配のために、どれだけの貯蔵物を自由にしようかを正確に知りうるよう、バレンシアの地方委員会のさまざまな部門に送られた。

創造的精神はまた、家禽の飼育の強化の面でも示された。鶏小屋、兎小屋、柵囲いが、日に日に増加した。単なる農民の知らなかった、兎の、雌鶏の新しい品種が次第にひろまった。そして、最初に手つけた共同体が、他を助けた。最後に、経済面での組織化の努力が、唯一

の行動の動機などではなかった。各共同体は、一つないし二つの学校を作った。すべての子供たちが学校に通った。革命の直後、レバンテの共同体は、アラゴン、カステイリヤ、アンダルシアの共同体のように、文盲に止めの一撃を与えた。スペインの田舎には、教育を受けない人々が七〇%もいたことを忘れてはならない。

この努力を補うために、当面の実際的な目標として、書記と会計係の学校が開かれ、そこには百人以上の学生が共同体から送られてきた。最近新設されたものにはモンカダの大学がある。レバンテの地方連合の仕事であるそれは、同地方連合によってスペイン農民全国連合の自由に委ねられている。そこでは、家畜、家畜の飼育、家畜に与えるべき世話、選別の方法、各品種の特色、農業、林業などが教えられ、そこには、共同体から三百の学生が送られている。

カタルニャ経済の共有化法令

以下は、カタルニャにおける諸産業の共有化の法令のほとんど全部である。この法令は、今日語りつがれているように、七月十九日の革命の直後に、労働者たちが諸企業を占拠し、彼らの労働者評議会を選出した時、労働者たち自身によって、あらゆる法令よりも以前に実施された自治管理を制度化したものである。

この法令は、それが日の目を見た時、その編纂者の一人、テラデリヤスによって、すでに「歴史的文書」とみなされていた。実際、人はそれを、今日、確かにいづれにせよ申し分のない形で、ユゴースラヴィアにおける、ついでアルジェリアにおける、自治管理を法制化した立法諸文書の原型として、見ることが出来る。この法令は、厳格に絶対自由主義的な見地からみて、上にあげた後の文書にも見られるものと同じ、美点と欠点とを合わせて持っている。そこでは、自治管理は完全ではなかった。事実それは、左翼のプチ・ブルジョア、カタルニャの共和主義左翼の代表、テラデリヤスと、CNTの代表、ホセ・セーナの間で行なわれた、妥協の産物なのである。この妥協は、二人の人物の間での、何日にもわたる仮借のない討議ののちにやっと行なわれた。別のアナキスト、カタルニャ政府の経済長官ホアン・P・ファブレガスが、CNTの名で記録に副署している。

ればならなかったからである。

一九三六年十月二十四日の法令、特にその最後の条項は、『スペイン革命の教えるもの』（一九五三年）のヴァーノン・リチャーズのようないく人かのアナキスト著作家によって、かなり手厳しく非難されている。しかし、この法令は、フランコ反乱の直後に、反ファシスト行動の団結の精神において、即座に自由共産主義を樹立することを断念し、そして、管理権を行使しようとし、同時に小所有を保護しようとしたプチ・ブルジョア共和主義国家の機構に参加しなければならなかったアナキストたちが決然と行なった選択の、不可避的な結果なのである（この主題については、二七三ページ以下を見られよう）。

労働者たちの経済権力への「国家」の干渉についていえば、それは明白なものであった。しかし労働者全国連合（CNT）もまたカタルニャ政府に強力な影響を及ぼしていた。そして、この法令は、部分的に、アナキストたちの仕事であった。それは、経済的統合の配慮と社会主義的計画化の驚くべき感覚によって促進された、とつけ加えておくのは適切なことであろう。各産業においては、「産業の労働の諸計画を決定し、それぞれ部門の生産を規正する」（第二十五条）ことを任務とする、労働者、組合活動者、技術専門家からなる産業評議会が用意されていた。各企業においては、生産は「産業の評議会によって樹立された全体計画と適合し」なければならなかった（第十二条）。

そのようなものである、一九三六年十月二十四日の法令は、その欠陥、その限界にもかかわらず、社会主義的計画化の配慮をもって、大企業における労働者権力の、小さな職場ないし職人的企業における労働者監査の、民主的行使を明示しようとし

この法令によって、自治管理は枠をはめられた。自治管理は、国家の枠の中に入れられ、工場の中での権力は、労働者たちによって選出された評議会と、この労働者評議会によって指名された管理人の間で分担された。しかし、この管理人の任命は、大きな企業においては、カタルニャ政府の経済評議会（省）によって認められねばならず、最後に、政府の監査官は、経済長官（大臣）によって任命された。

この法令は、別な点からみると、今日の「評議会社会主義」の若干の信奉者が一方を他方に対立させなければならないと考えている、二つの傾向のもの、一方の労働者評議会と、他方の組合組織とを、提携させる配慮を払っている。事実、第十条は、評議会内において「必要なら、労働者たちが属している各種傾向の諸組合もまた、その加入者の数に比例して代表される」、そして第二十四条は、「比率にしたがって任命される、各労働組合中央の八人の代表は、産業の総評議会に参加する」と決定している。

このように定められた共有化は、完全なものではない。なぜならそれは、種類として最も多数を占める、企業の一範疇としてしか制度化されなかったし、それ以外のものとして、私有部門も存続していたからである。実際には、共有化は、法令の字句よりもずっと先にまで進んだ。というのも、多数の負債企業が、第二条にのべられた共有化の基準にあてはまらないにもかかわらず、それでも社会化されたからである。

私有部門における労働者評議会の運営に関して述べられた規則は、少数の従業員に対して特に好意に満ちた精神を示している、先進的であった。なぜなら、労働者監査委員会は、その権限の中で、なかんずく、労働の中での厳格な規則に注意しなけ

た、一九一七年十月のロシア革命以来最初の、立法文書となっている。この文書は、もちろん、多くの批判を招くものである。しかし、それはおそらく、厳格なアナキストたちや今日の「評議会主義者たち」（労働者評議会の信奉者）からの「現に受けている」あらゆる攻撃にふさわしいものではない。

法 令

第一条 第一に、この法令によって設定された規定によって、カタルニャの商業および産業企業は、次のように分類される。

a 共有化企業、ここでは、管理の責任は、企業を構成し、企業評議会によって代表される、労働者たちに帰する。

b 私的企業、ここでは、管理は、労働者監査委員会の協力と監査をうる、所有者ないし管理人の責任に属する。

a 共有化企業

第二条 一九三六年六月三十日に、百人以上の賃金生活者をするにつけていた、そしてまた、仕事につけていたのはそれ以下の数の労働者であるが、経営者たちが叛逆を表明したか経営を放棄した、産業ないし商業のあらゆる企業は、義務的に共有化される。例外として、百人以下の労働者の諸企業も、労働者の大多数と一ないし複数の所有者との間で交された同意ののち、共有化される。

れる。

第八条 共有化が実現に移される過渡的な時期に、いかなる労働者も企業から解雇されることはできない。しかし、彼は、状況がそれを要求するなら、同じ職種と職階の範囲で、職場を変えることができる。

第九条 外国に属する利害関係が諸企業内において代表されているあらゆる場合に、それらの企業の評議会ないし労働者監査委員会は、それを経済評議会に伝える義務がある。経済評議会は、係争の状態を討議し、問題の利害の保護を保証するために、利害関係のあるメンバーないし彼らの代理人を呼び寄せる。

b 企業評議会

第十条 共有化諸企業の管理は、労働者たちによって任命された、総会において彼らの中から選ばれた、企業評議会によって確保される。この総会は、企業評議会のメンバーの数、五人以下でも十五人以上でもあつてはならない数、を決定する。その構成に当たつて、各種の業務、生産、管理、技術業務、商業業務が代表される。必要なら、労働者たちが属している各種傾向の諸組合もまた、その加入者の数に比例して代表される。

委任の期間は二年とし、評議会の半数は、毎年、改選される。企業評議会委員は、再選されることができる。

第十一条 諸企業評議会は、株式会社、および管理人の監督下におかれていた諸企業の、元の役員会と同じ

れることができる。五十人以上百人以下の労働者の諸企業も、労働者の四分の三の同意ののち、共有化されることができ。

経済評議会はまた、国民経済におけるその重要性によって、あるいは他の理由によって、私的経営から取り上げられなければならない他の諸企業の共有化も、決定することができる。

第三条 前条の補足として、叛逆を表明した使用者たちの指名は、民衆法廷の処置によってのみ行なわれる。

第四条 リストに記載されているすべての個人は、その意見がどのようなものであれ、彼が従事しているのが知的労働であれ肉体労働であれ、企業を形成している従業員全体の数の数の中に含まれられ、労働者の一部をなしているものとみなされる。

第五条 この法令が施行される以前の企業に属していた資産と負債は、すべて、共有化企業に移される。

第六条 生産と販売の自治的な機関によって形成されていた諸企業および同じ商号の下に多数の商店ないし製造所を集めていた諸企業は、同じ共有化組織の形態の下で、運営を継続する。それらは、経済長官の、カタルニャ経済評議会への通告ののち、明白な許可によってしか、分割されない。

第七条 共有化企業の枠内で、元の所有者たちないし管理人たちは、彼らの技術専門家ないし管理者としての能力を欠くことができない、と認められる職務に配置さ

責任を持つ。

諸企業評議会は、それぞれの企業の労働者に対して、また関係産業の総評議会に対して、管理の責任を有する。

第十二条 諸企業評議会は、その職務の達成に当たつて、生産は産業の総評議会によって樹立された全体計画に適合しなければならないことを考慮し、自分らの努力と、自分らが属する産業部門の発展のために決定された諸原則とを調整する。利益の幅の決定、販売の諸条件の取り決め、原料の購入、そして、設備償却の通則に関するいさ、流動資本、積立金、利益の配分は、産業の総評議会が手管を整える。

社会的な面においては、諸企業評議会はそのために作られた諸規則の厳密な実現に注意し、そしてそれが適切だと判断した他の諸規則を提案する。諸評議会は、労働者たちの肉体的、精神的な衛生の保護に必要なあらゆる措置をとる。それらは、文化的、教育的な充実した事業に献身し、レクリエーション、スポーツ、文化などの、クラブ、センターの創設を促進する。

第十三条 この法令の布告以前に占拠された諸企業の諸企業評議会および布告後に共有化されることとなる産業の諸企業評議会は、十五日以内に、経済評議会書記長にあつて、所管の事務所へ手渡される書式にもとづいて、それぞれの結成証明書を送らなくてはならない。

第十四条 永続的なやり方で企業の健全な運営に注意

するために、評議会は一管理人を任命し、彼に対し、その職務のすべてまたは一部を委任する。

五百人以上の労働者が働いている諸企業においては、資本金が百万ベセタを越す諸企業においては、国防に關係する資材を製造し加工し販売している諸企業においては、管理人の任命は、経済評議会によって承認されなくてはならない。

第十五条 共有化されたあらゆる企業においては、企業評議会に参加する、労働者たちの同意をえて経済長官によって任命される、政府の監査官の存在が義務とされる。

第十六条 企業の法的な代表は、管理人によって行なわれる。そして、彼の署名は、企業評議会によって選ばれた同評議会の二名のメンバーに副署されるものとす。管理人と二人の副管理人の任命は、経済評議会に通知され、経済評議会は、彼らを、銀行や各種の公的機関に対して信任する。

第十七条 諸企業評議会は、それぞれの会議の議事録を作製し、関係産業の総評議会あて、それぞれが可決した決定を保証する写しを送付する。それらの決定が必要とした場合、産業の総評議会はそれが適切だと判断した形で仲に入る。

第十八条 諸評議会は、労働者たちによって表明された要求ないし提案を聞く義務がある。諸評議会は、それらを記録し、必要なら、それらを産業の総評議会に通知

する。

第十九条 諸企業評議会は、各任期が終わってから、総会に集まった労働者たちに、事業報告をしなくてはならない。

同様に、諸評議会は、産業の総評議会にあてて、詳細に事業の状況や将来の諸計画を明らかにする、六カ月ないし一年の貸借対照表と見積書を知らせる。

第二十条 諸企業評議会は、明らかな無能力の場合ないし定められた規範を無視した場合、総会に集まった労働者たちによって、また産業の総評議会によって、部分的にあるいは全体として、解任されることができる。解任が産業の総評議会によって発表された場合、諸評議会は、総会に集まった企業の労働者たちの同意をもって、経済長官に対してこの決定に異議を申し出ることができ。しかし経済長官の決定は、経済評議会への報告のうち、最終的なものとなる。

c 私的企業における監査委員会

第二十一条 共有化されていない、産業ないし商業においては、労働者監査委員会の設置は、義務的なものである。この委員会においては、企業を形成する、生産の、技術の、管理の、あらゆる業務が代表される。委員会を構成する委員の数は、労働者たちの自由な選択に委ねられる。各組合の代表は、企業内におけるそれぞれのメンバーの数に比例して与えられる。

第二十二条 監査委員会の職務は次のとおりである。

a 労働諸条件の監査と、賃金、時間割、社会保障、衛生と安全などに実施される処置の厳格な執行、ならびに労働者たちの厳格な規律の保証。管理人が職員に対してしなければならぬと考えたすべての警告と通知は、委員会を通じて伝えられる。

b 管理上の監査、すなわち、現金であれ銀行を介してであれ、入金と支払い、それらの取引と企業の重要事との関係、の監査。そのほかの商業取引の監査。

c 生産の発展を完全なものとするための、企業の所有者との緊密な協力による、生産の監査。労働者監査委員会は、労働の健全な運営を確保する目的で、技術専門家たちとの最善の関係を維持する。

第二十三条 経営者たちは、彼らが関係産業の総評議会に送る、年間の貸借対照表と見積書とを、労働者監査委員会に提出する義務がある。

d 産業の総評議会

第二十四条 産業の総評議会は、以下のものによって構成される。

当該産業の、企業評議会の四人の代表。

比率にしたがって任命される、各労働組合中央の八人の代表。

経済評議会によって任命される、四人の技術専門家。総評議会のそれぞれは、経済評議会の当該部門の代表

によって主宰される。

第二十五条 産業の総評議会は、産業の労働の諸計画を決定し、それぞれの部門の生産を取り決め、生産に関するすべての問題を規正する。

第二十六条 産業の総評議会によって可決された決定は、執行されるべきものである。いかなる企業評議会も、いかなる私的企業も、その執行に反対することはできない。それらは、せいぜい、経済長官に訴願を提出できるが、長官の決定に異議はさしはさめない。

第二十七条 産業の総評議会は、カタルニャ経済評議会との関係を維持し、共同の行動を必要とする事態が生ずるそのたびに、経済評議会と一致しようとするやり方で、緊密に仕事を遂行することに注意する。

第二十八条 産業の総評議会は、当該産業の全般の運営状況を説明し分析した、そして新しい諸計画が明確に提示されている、詳細な文書を、それぞれの場合に定められた期限内に、カタルニャ経済評議会に届けなくてはならない。

e 産業の集団化

第二十九条 産業の諸総評議会の設立と組織化を促進するために、経済総評議会は、この法令の公布後十五日以内に、それぞれの特殊性に従って、異なった諸産業の分類と集団化を、そして、各部門がそれぞれさらに細分されている諸部門間の調整を、提案する。

第三十条 前記の集団化については、原料、発売までのさまざまな産業活動、専門技術的な統一、商業管理が考慮される。そして、可能な場合には、完全な集中化に達するよう意が払われる。

第三十一条 同時に、経済評議會は、前記諸産業の創業と運営を管理する規則を提案する。

バルセロナ、一九三六年十月二十四日

政府議長 ホセ・テラデリヤス

経済長官 ホアン・P・ファブレガス

D・A・デ・サンティリヤンの著作

絶対自由主義的計画化の図式³⁾

労働の組織——工場評議會から経済評議會まで

組合は、経済の基礎における運営の責任を負った組織である。

われわれは、その役割を、十八の評議會に要約する。すなわち——

基本的な必要——食料の、住居の、衣服の、評議會。

原料——農業生産の、家畜の、森林の、鉱山の、漁業の、評議會。

連絡の評議會——輸送の、通信、新聞、書籍の、信用の、交換の、評議會。

精製産業——金属と化学産業の、ガラス産業の、陶器産業の、評議會。

電力の、動力の、水の、評議會。

健康の評議會。

文化の評議會。

それぞれの評議會は、経済の各地区評議會を組織する。

それらの同じ評議會は、基礎として地方評議會の組織に、全国的な面で経済の連合評議會の組織に、貢献する。

すでに図式化した経済の機構とともに、現存の労働者組織の中で、最大限の調整が達成される。資本主義も、社会主義的と称する国家も、この統一に達することはできない。

この機構はさらに、グループの中における個人の、組合の中におけるグループの、各評議會の中における組合の、自律を妨げないという利益を持っている。

必要な場合には、絶対自由主義的な働きかけにしたがって個人に圧力をかけるもの、しかしまた、本質的に権威主義的な機構とともにでは不可能であるもの、各個人間の交渉を助長しうるとともに自由の保証でありうるものが、連合的な機構である。

経済の地方評議會

都会における経済の地区評議會、農村における自治体ないし管轄地評議會は、地区評議會よりはずっと広範囲だといえ同じ役割を果たす経済の地方評議會を組織するために、提携する。各地域は、政治的な自治を持つ。ほかよりもずっと豊かな地方があるにもかかわらず、スペインには、それ自身のみで事足りることのできる、独

立した地方はない。

経済の地方評議會は、その信用と交換の評議會を通じて、それに属する地域の生産と人口と消費の、労働力の、原料の、統計を作製する。経済の地方評議會は、そのメンバーを改選し、実現すべき計画を決定する会議を、定期的に開催する。地方評議會への代表は、地区評議會を介してか、ないしは、国の最も重要な経済機関、経済の連合評議會を組織するための諸会議を通じて、選出される。

経済の連合評議會

最後に、国の最大の調整センター、経済の連合評議會に到達する。

労働者たちによって下から上へと選出される、経済の連合評議會は、より多く生産しよりよく分配する、という同じ目的のために、国のあらゆる経済を調整する。

届けられた統計に助けられて、連合評議會は、いつでも、全国の正確な経済状況がどのようなものかを知っている。

連合評議會は、最も恵まれた地方、過剰品を持つ地方を知り、どこに輸送と通信の欠陥があるか、どこに新しい道路が、新しい耕作地が、新しい工場が必要かを確かめる。わずかの資源しか与えられていない地方は、有益な事業をやりとげるために、国によって援助される。

《自由共産主義》の二つの概念—— ユートピアか経済統合か

〈フエノスアイレス、一九六五年七月十日〉

「私の書物」「革命の経済組織」は、私がわれわれの雑誌や新聞の中ですでに数年にわたってやってきた宣伝と、結びついていきます。私は、天国のようなユートピア主義ではなく、即時に実現する実際のな方途を示したかった。組合組織を連絡する機構は、私によれば、好都合な形で、産業と土地の資本主義的所有者にかわりうるものでした。そして私は、バクレーニンの集産主義ないしブルードンの相互扶助主義から派生した展望よりもずっと完全なものとして提示される、クロボトキンそのほかによって普及された、自由な独立したコミュニティと称するものにもとづく、自由共産主義の發育不全を越えるのに貢献しようとしたのです。私は事実、バクレーニンやブルードンから出た、真の人間の本性にずっと身近な展望を尊重しています。なぜなら、人間は、高潔であり、犠牲に満ちていますが、同時にエゴイストでもあるからです。

私は、多数の個別の業務の管理のための地区的な自治を、理解しますし、擁護します。しかし、コミュニティは、共同の活動の中心です。労働は、姻戚関係の連携であらうとなかろうと、地区的な、地方的な、全国的な、

国際的な面での、連携を作ることを必然的に強いるものです。労働の中では、したがって経済の中では、私は、家族的な姻戚関係、あるいは、親密な友人関係を気にかけてはいません。そうではなく、私が気にしているのは、能率です。私は、独立を賞揚できません。私が賞揚するのは、あらゆる国境を越えた相互依存です。組合組織、産業の地区連合と全国連合は、スペインにおいて、敵であり時代遅れの、私的企業が行ないえたよりもずっとよく、生産と分配の制度を改善するために、具体的な可能性を手中にしています。一九三六年、われわれは、スペインの経済発展を強力に促進させることができました。というのわれわれは、既存の施設に信条の熱意と努力の強化を付け加えたからです。問題なのは、第一段階において、国の産業と農業の水準を高めることでした。われわれは、それを促進できると感じていました。しかしそれは、われわれが自由にしうる機関、組合組織を通じてであって、自由な愛の実践の信者や裸体主義者の牧歌的な絶対自由主義的コミュニティを通じて、ではありませんでした。

私は、その上、労働手段や土地の所有は労働者や農民に帰属する、と考えている一般の傾向を心配していません。そして私は、この傾向、つまり予想される新しい階級、企業の管理者や指導者の新しい階級に、警戒の目を向けました。土地、工場、輸送手段は共同体に属し、社会的な役割を果たすべきです。もし、われわれの手中に

われは、組合、産業連合などのような、行動と実現の機関を、基礎として持っていたからです。

1

Augustin Souchy スペイン革命のために尽くしたドイツのアナルコ・サンジャカリスト。「共有化、スペイン革命の建設的な事業」(一九三七年四月、一九六五年再版)の抜粋。略称、CNTは、全国労働連合(アナルコ・サンジャカリスト)を、FAIはイベリア半島アナキスト連盟を、UGTは労働者総同盟を意味する。

2

私は、バレンシア地方で、農業労働者の組合の集会に列席した。そこには、小土地所有者たちもまた出席していた。彼らはまた、討論にも参加することができた。彼らは、あれやこれやが不足していることを歎いた。人々は、彼らに組合に入るように勧めた。ある委員会が、土地の労働に導入すべき改善についての報告を提出した。出席していた労働者たちが、どんなふうにも委員会の提案を彼らの個人的な経験によって補ったかを見るのは、きわめて教育的であった。(アウグスチン・スーチャー注)

4

Juan Comorera 一九三六年に共産主義者となったカタルニャの社会主義者。カタルニャ政府顧問、のちに党から除名される。肉体的に清算されることを恐れて、秘密裡にスペインに戻り、そこで重罪に処せられ、彼は獄中で死んだ。

5

「流れに抗して」誌上にフランス語訳された、「バルセロナ

あるそれらが、その役割を果たさないとすれば、新しい所有の形が、以前の形同様、かなり受け入れられるものとなりましょう。「土地を農民に、工場を労働者に」というスローガンは、それが新しい私的所有、少数者の所有の代わりに大多数の所有という概念に導かれなければならない条件付きでなければ、正当とは思われませんでした。社会、共同体は、少数者と大多数のものの利害関係を越えています。土地の所有は、他の生産手段がそうでなくてはならないように、社会的財産です。私は、資本主義的でも独占的でもない、新しい世界に到達する前に、新しい所有者の段階を通ることが必要である、とは考えません。

私が個人的には出席しなかったサラゴサの大会において、クロボトキンふうの概念に呼応する未来組織の大綱が認められました。私の書物の思想から着想をえた計画は、私の発意にもとづいて、「グラフィック芸術と紙」連合によって、同大会に提出されました。しかし、われわれがサラゴサにいなかったで、私が『土地と自由』に発表したイサック・ブエンテの小冊子をもとにして、フエデリカ・モンツェーニが準備したものが可決されました。その単純きわまる見解に反対して、私は、当時、『新時代』誌に、『革命の経済組織』の思想を主張しました。そして、間もなく、われわれの予想を実践に移さねばならない時がきたので、人々は、私が予見したように、一般にはふるまったのでした。なぜなら、われ

新聞」よりの抜萃。

CNT文書よりの抜萃。

- 7 6
Gaston Leval フランスのアナルコ・サンジカリスト、
三二一ページに見られるように、一九三六年の革命よりず
つと以前から、スペインのアナルコ・サンジカリズム運動
に緊密に結びついていた。イタリア語訳「反フランコ反ス
タールリン」よりの抜萃。別の題名で、近くフランス語版が
刊行される。「絶対自由主義スペイン」の表題の下に、一
九七一年、ラ・テート・ド・フリュ社、パリ、から刊行さ

れた。——訳者）

- 8
カタルニャ政府の経済大臣になったD・A・デ・サンティ
リヤンは、この図式を一九三六年七月十九日の革命前に発
表した。（彼の書『革命の経済組織』、一九三六年、からの
抜萃）

- 10 9
ディエゴ・アバ・デ・サンティリヤンの未発表の手紙。
一九三六年五月に、サラゴサでのCNT大会で可決された
綱領（I巻二七九ページおよび二八五—六ページを見よ）
のいくつかのユートピア的な条項への当てこすり。

ヴォーリン 1882 - 1945

ヴォーリンの仮名の方がよく知られている、フセヴォロー
ド・ミハイロヴィッチ・エイヘンバウムは、一八八二年八月十
一日に生まれた。セント・ペテルスブルグ大学の法科に籍をお
いたが、すでに社会革命党に惹かれていた彼は、間もなくそれ
を放棄する。彼は、社会革命党によって、一九〇五年の革命に
積極的にかかわることとなる。彼は、ガボン司祭に先導された
冬宮への労働者の行進に参加した。しばらくして、彼は、セン
ト・ペテルスブルグの最初のソヴェトの誕生に協力する。ツァ
ーの警察に逮捕され、投獄され、結局、シベリアに流刑にされ
たのち、一九〇七年に、首尾よく逃亡して、フランスにたどり
着く。

ヴォーリンがアナキストになったのは、パリにおいてであ
る。一九一三年以来、反戦国際行動委員会のメンバーとなり、
彼の活動は、一九一五年には逮捕に価するものとなる。政治犯
収容所に監禁されかねなかったヴォーリンは、商船に船艙係と
して乗り込むことに成功し、その船で、アメリカ合衆国にゆ
く。それ以前に何カ月にもわたって、彼はすでに、アメリカに

あるロシアのアナルコ・サンジカリストの週刊紙『労働の声』
に、パリ通信を送っていた。一九一七年に、編集部は——それ
とともにヴォーリンも——この週刊紙をセント・ペテルスブ
ルグに移転する目的で、革命ロシアに帰る。

この時期、（ピョートル・クロボトキンの思想の影響下にあ
った）ヨーロッパに残っていたロシアのアナキストたちと、ア
メリカに滞在していたロシアのアナキストたちの間には、統一
行動が確立されており、それは声明によって、ついで、当時、
ベトログラード・アナルコ・サンジカリスト宣伝同盟を名乗っ
ていた組織によって、現わされていた。その同盟が、アメリカ
版の延長と見なされていた『労働の声』の発行を決定し、ヴォ
ーリンはその編集者に選ばれる。十月革命のち、『労働の声』
は日刊紙となり、ヴォーリンは編集委員会に加わる。そこには、
なかなか、アレクサンドル・シャビエロが重要な役割を
果たしていた。

プロレタリア革命後まだ数カ月しか経っていない頃、ヴォー
リンは、この新聞の中で、怖ろしいほど予言的な警告をす